箕輪町地域包括ケアシステム推進協議会会議録

令和４年 11 月 17 日（木）　13：30～15：10
箕輪町地域交流センター研修室ＡＢ

（出席：委員 10 人、事務局６人、欠席：中川委員、北川委員）

次　　第

１　開会

２　委嘱状交付
　　新規委員の紹介

３　会長あいさつ
　地域包括ケアシステム推進協議会ということで、ぜひ皆様からご意見をいただければと思います。新型コロナもまだ落ち着かない。いつまでこの状況が続くのかと思うところ。
　皆さまからご意見をいただき、この町の将来ということでぜひ協力、理解いただきながらご参加いただければと思います。

４　協議事項
（１）地域包括ケアシステムの進捗状況について（本資料・付属資料）
○町の状況と協議会の役割（p１～５）
　質疑応答なし

① 生きがいづくり・健康づくり・介護予防の推進（ｐ６～11）
東会長　　：男性に魅力的な会議となると今のところ予定はない。街中で男性が夜、飲みに行ったりしたときにトイレに集まって話をしている。行けば人がいる環境は大事。少しくつろげる場所も１つ大事なのかなと思う。ちょっと時間を潰せるようなところがあるといいのかな。
寺平委員　　：資料の 10Ｐで男性にも魅力的。10Ｐの資料から男性の数が少ない。議会の福祉文教常任委員会で今週の月曜日に静岡県川根本町に、健康長寿の街づくりの先進事例として視察

した。そこでも男性の参加者が少ないことが課題になっていた。男性が女性の集まりの中にくるのは敷居が高いため、男性の料理教室を開催。集まってくる人は、みんな同級生だったため、ちょっとした同級会みたいな形になり、それをきっかけにしてある程度男性も出てくるようになったという事例があった。男性に特化した取り組みの現状はどうか。

事務局　　：ご意見ありがとうございます。男性への取り組みは現状ない。いきいき百歳体操には男性も参加しているが所がある。

仕事や農業など一所懸命やってきたことや地域の特色もある。箕輪町でも地区ごと特徴がある。箕輪町は農業も盛ん。しっかり見極めながら、どういったものがいいかというところも検討していくことは大事だと思う。

② 地域全体で高齢者を支える体制の整備）（ｐ12～15）
③ 医療と介護が一体となった在宅サービスの推進（p16・17）

小林委員　　：我々も高齢者、障がい者、老々世帯の家庭を訪問している。前は元気だったのに、言われたことを理解できなくなっている方がいたりする。状態が悪化していると町へ繋げるようにしている。みんな、それぞれの思いがある。地域の中で、男性に集まる場所の情報提供を行うが、「俺は大丈夫」と言い勧めても中々繋がらない。

唐澤委員　　：木下区でもいきいき体操をやっている。ふきはら大学など開催しても女性の参加が多い。登山をしても８割以上は女性。女性の方がネットワークをつくるのが上手。男性もぜひそうなってほしい。

ある本を読んだとき人間は１人ではいきていけない。健康で長生きするには、いろいろな人脈を気づいている人だと書いてあった。

公民館でマレット開催をしている。男性が多く参加している。年の割に元気な方多いという印象。何かきっかけがあり仲間ができるなど巻き込むことができればと思う。

また、行政で必要な物品を用意してもらったり、公民館利用料の免除など力を入れてもらえるのは嬉しい。

丸山委員　　：デマンドタクシーの話があった。自分が訪問していく中で、高齢者の足の確保が必要と感じる。タクシーを使えばと思うが金額もかかるので、デマンドタクシーをまた検討してほしい。買い物に行きたいから免許を返納せず、運転している利用者がいる。中には危ないなと思う方もいる。ぜひお願いしたい。

事務局　　：実証実験については、再検討中。伊那市や辰野町などドア TO ドアの方利用者がいる。検討していきたい。

④ 認知症になっても自分らしく安心して暮らせるまちづくり（P18～20）

西澤委員　　：すまいるサポートの登録団体 110 団体。10 年目になる。当事者がどういう暮らしをしているのかというところに視点を置いて、いつも言っている美容院やクリーニング屋などに生活の中でやりとりをしながらその変化に気づけるような人たちに声をかけた。10 年経つと役員や担当が変わるの等して、課題がまた新たに出てきている。サポーター要請講座を受講してもらうなどの学ぶ場、町民に知らせる場が大切。また、区の文化祭などで掲示することで皆さんの目に触れる啓発をしてきた。

見守りシールの交付が始まりあんしん見守りを登録する方が増えた。そこは大きな成果だと思う。

城倉委員　　：認知症の方が安心して暮らせる地域づくりは大切。実際に、虐待があって家では生活できないから施設へと相談が包括からある。そういう状態を作らないために、生活しやすい町づくり考えていかないといけない。声をあげられる方は虐待につながらないが、自分の中で抱えてしまう、手が出てしまう、大きな声で言ってしまう気持ちもわかる。困っている人の吸い上げは大切。

施設に入って、家族から相談を受ける。認知症の方を受け入れてあげればいいというが、なかなか難しい。実際に相談受けた中で、暴力や大声に出てしまうことは理解もしたい。共感もしてあげたいなと思う。施設介護と家族介護は、少し異なる。実際に教育を受けたとしても自分の家族が認知症になったらまた違う。当事者の会でお互い「わかるよ」という話ができればよい。

東会長　　：教育を受けていても認知症を受け入れていくのは難しい。のぞ

みの会など話をできる場があればいいのと思う。相談できる人がいればいい。相談できるエネルギーがない方の吸い上げが大切。

事務局　　：なるべく小さなうちに声を聴いていきたい。のぞみの会は、当事者や家族の方も参加している。また地域にも出向きながら声を聴いていきたい。

⑤ 家族介護支援（P21）
⑥ 介護人材の養成・確保（p22）
⑦ 高齢者の住まいの確保（p23）
⑧ 安全・安心な暮らしの確保（p24・25）
⑨ 高齢者福祉サービス（p26）

寺平委員　　：町民の方から住民サービスの一覧があれば助かるといわれたことがある。町民に配布していないのか

事務局　　：必要であれば配布できる。ホームページでも見ることができる。

寺平委員　　：8050 問題について、課題の１つとして状況把握が難しい。箕輪中学校でも不登校の生徒が多い。高校は県の所管になってしまうので、高校に入っているかどうかの把握ができない状況。中学校で不登校の生徒はおそらく高い確率で将来的に引きこもりになるであろうということで、こども未来課、学校支援課、福祉課で連携して切れ目のない支援をするために情報共有していると答弁で聞いた。現状把握に対する取り組みについて教えてほしい。

事務局　　：　窓口に相談があった場合は、相談システムの中でこども未来課、健康推進課、福祉課で連携をしている。それがすべてではない。学校教育課の方では中学校まで、こども未来課はさらに上も含めて把握に努めている。

寺平委員　　：テレビでも 8050 問題が課題といっていた。30 年前は登校拒否等の人数はゼロではなかったが、現在の登校拒否等の数よりは少なかった気がする。8050 問題は今後、深刻化してくると思う。国も孤独担当大臣が新設されてこれから対策が進んでくると思う。現状把握して対策をしてもらえばと思う。

高橋委員　　：高齢者向けサービスについて、訪問理美容サービスの対象になるような人が沢山いるのに、８名しかいないと知った。デイサービスのついでにカットしてもらう。訪問入浴の職員が散髪してくれるケースがある。

条件に該当しないけど、行くことが大変という方がいる。せっかく

あるなら有効活用できる場があればいいなと思う。デイサービスで切ってもらっても、費用は掛かっているので補助を出してもらうとよい。
緊急通報システムは、１０名利用者がいるが装置を持ち歩いているなんてこの人できないと思う方も多い。見守りカメラなど、町で用意しているよりいい性能のものがある。そういう人への補助があればいいなと思う。
配食サービス使っている方も何名かいる。配ったお弁当を食べていないことがあったときは、業者が気づいてくれればと思っている。他の市町村では、無料配布しているところもある。無料で配布してくれることで、少しでもいいなと思ってサービス介入のきっかけになればと思う。検討願いたい。

事務局　：カメラも検討したい。お弁当を無料で配布する件についても、参考にしたい。

東会長　：床屋さんが来ているときはデイサービスの事業所は利用料が算定できない。実情知ってもらえばと思う。

⑩ 保険者機能強化推進事業評価（p27）
⑪　見える化調査分析シート（p28）

〇地域包括ケアシステム推進に向けた課題と取組み（p29～30）

吉江委員　：もうすぐ 70 歳になる。生きがいを持って生活していきたい。病気にいつなるか分からない。箕輪町は、訪問看護が充実している。理学療法士、作業療法士、医療機関の方、病院もたくさんあるが、介護の仕事は精神的にも肉体的も大変。離職率も、将来サービスを利用するにあたって安心できる。働いている方も生きがいをもって働いていることがとても大事だと思う。資格をもつための補助があると聞いた。働いている方にも補助を出してもらいたい。

事務局　：介護職の賃金の部分で多少改善があった。
補助となると町単独で何かするのはなかなか難しい。昨年は事業所への補助があった。コロナも中々収まらず、円安も踏まえて理事者とも話していければと思う。

東会長　：さきほど、訪問看護の話がでた。現在、うちの事業所の平均年齢が 70 近く。10 年経つと立ちいかなくなる。処遇改善は、介

護職だけ。ケアマネや看護師にはつかない。離職した看護師が、事業所で働いてくれるような環境を作っていかないと働き手が減っていく中で求人競争をかつぬかないといけない。働きがいなど事業所から発信していきたい。

西澤委員　：いつ病気や認知症などになるかわからない。それをどのように備えるか。備えるということになると、1人の人がずっと見ている・関わっているわけではないため、支援が項目ごと切れてしまうことが課題。

先ほどの救急キットの話をすると救急隊員が駆け付けた時に、救急キットで医療情報は見られるが葬儀場はどこで等は記載していない。いろんな人と、話をしながら更新をしていく必要がある。

知っている・知らないかで人生が変わることがある。介護者の支援をどのようにしていくかで本人の支援も変わってきてしまう。今後、地域包括ケアシステムは、子どもから障がい者、高齢者など幅広くなってきている。おひとり様も、高齢者だけでなく30代40代の方もいる。全体的な課題を考えて支えていく必要がある。

8　その他

9　閉会